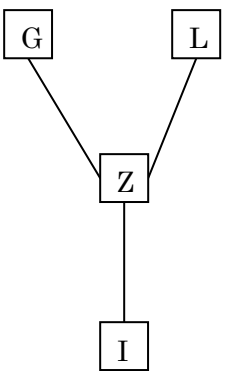


平成二十四年十月十五日

歐洲の鐵道會社は、行先を異にする車輛を編成、以つて一つの列車になすこと珍しからず。故に、いかなる旅行案内書にも車輛毎に掲示せらるる行先確認の後に乗車すべきの指示あり。我、この常識ならひとなりて過てることなし。しかるに本年九月、有らうことか、逆方向の電車に乗りたるは滑稽とこそ言ふべけれ。

所はスイス、山村グリンデルワルト（G村）に滞在中、一日、別の山村ラウターブルンネン村（L村）所在なる名所に初めて行かむとす。L村に至る直通電車無ければツバイリューチネン驛（Z驛）にて乗換を要す。Z驛は麓のインターラーケンオスト驛（I驛）に通ず。即ち、Z驛を中心にG、L、I、はY字形をなす。



G、Lよりそれぞれ三輛にて下る列車、Z驛にて合流、統合せられて六輛編成となり麓なるIに下る。逆にI驛より登る列車、當初六輛編成なるもZに到着後、前三輛が切離されGを目指して左に、残る後ろ三輛はLを目指して右に登る。

この日、我等はG驛より下り二十分餘、Zに至りて下車。Iより登り來る電車に乗換へLに向はむとす。この間、線路に電車操作上の小トラブルあり。驛員等の修復作業に興味覚え間近に寄りて見る。驛員、不手際見らるるを不名譽と感じたるもの如し。

突然、登り電車到着。急ぎ乗込む。窓外の景色樂しめる妻、ややありて曰く「G村に似る景色現はる」。我「當地方の景色、いづれも似る」と取りあはず。

程無くして電車、我等直前に出發せるG驛に入る。やんぬるかな。逆行の愚、犯しけり。然り。Z驛にて切離されし後半三輛のいづれかに乗るべきところ、前三輛に乗りしものなり。

止むを得ず再び下りの列車に乗り、妻と誤りの因を論ず。結論以下の如し。從來、車輛行先掲示板常に二人して確認し合ひ乗車したれば間違ひなし。今回の旅、思ひ切りて奮發し一等切符購ひし故、折角の一等切符有効に使ひたき思ひ何物にも優先、二人諸共、行先確認よりも列車等級確認に心奪はれたるこそ理由なれ。分不相應の行ひすなる時は一層の注意肝要なる事あらためて知る。

前車同様、Z驛にて下車し乗換電車待つ間、先刻トラブルの驛員近づきて目合はしぬ。彼が顔に書いて曰く「そが顔見覚えあり。つひ先刻、我がトラブル眺めし客め。何故、また來たるか。今度は汝自身のトラブルにてこそあれ。呵呵」。